

---

# スーパーロボット大戦OG 影に属するアホの子戦記

えーさく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スーパーロボット大戦OG 影に属するアホの子戦記

### 【Nコード】

N9347Y

### 【作者名】

えーさく

### 【あらすじ】

システムXNの生んだ次元断層に巻き込まれ死んだ1人のヲタクは、神に転生を提案された。ヲタクは次元断層の先の世界を選択し、転生した。「極めて近く、そして限りなく遠い世界」そんな世界にやって来てしまった主人公の運命や如何に？ ストーリーを修正しました！

## プロローグ

人生何が起こるかなんてわからない。

そう、わからないという絶望だらけ。

明日に希望も持てず、惰眠を貪る日々を送る。

某悪夢少佐みたいなのが居れば喜んで起き上がりますが……。

「これは夢だ……」

「残念ながら夢ではない」

呟く自分にそう言ったのは、悪夢少佐の上司。閣下だった。

「ジーク・ジオンッ!!」

「ジーク・ジオン!」

やったら応えてくれました。感動で死ねそう。

「さて、急で唐突だが、真実を述べれば、貴公は死んだ」

「そーなのかー」

うん。はい。死んだそうです。

確か今日はDVDを返しに行つて……

「所謂転生トラックに追突されて貴公は死んだ  
い」

わけではな

「あつえ！？ならどーして？」

確かにトラックに追突された覚えはないけど……。

「実はな、次元断層に巻き込まれて死んだのだ」

「次元断層 ！？」

まさか三次元リアルで次元断層なんて

「げ、原因とか……何なんですか？」

「ふむ。システムXNの影響による次元断層が、貴公の前に現れた  
のだ」

そんなのアリ？

「本来なら死ぬべきでない貴公であった。故に貴公には転生してもらう」

死因はアレなのに、ちゃんと転生させてくれるの？

や、その前に

「閣下は神様なのですか？」

「うむ。貴公のいうように僕は神だ。この姿は貴公との会話にあわせて用立てたものだ」

ああ、そーなのですか。

でもいきなり転生なんていわれても

あ。

「次元断層の先には、世界はあるのですか？閣下」

「ん？ああ、貴公の地球ではない地球がある」

「ならそこをお願いいたします」

「良いのか？」

「はい。それで構いません。あとはそちらにお任せします」

「そうか、だが良いのか？貴公自らが選んだ能力を付随することも出来るが」

「それは閣下のさじ加減にお任せします。それに、下手に欲張ってしまいそうですから」

「ふむ。委細承知した。貴公の次生に幸あらんことを祈る」

「ハッ！有り難き幸せ。御世話になります、閣下！」

敬礼を閣下にと送ると、急に眠くなってきた。

うつ、か、つ、かの前、で、寝るわけ、には

## 第1話 招かれた異邦人・エトランゼ・

極めて近く、そして限りなく遠い世界の地球。

異星人の襲来を退け、平和が続く世界に、1人の来訪者が訪れた。

「 きろ お きろ 」

「 んむう……あと5分……」

「 起きろー!ー! 」

ゲシッ

「 あつっ!ー!い、いったあゝい!ー!もう!ー!いったいなんなのさあ  
!ー! 」

僕は睡眠を邪魔されたことに腹を立てて、僕を叩き起こした人物に怒鳴った。

「 それはこちらのセリフだ。いったいどうやってこの部屋に入った。  
どこの所属だ、貴様 」

寝ぼけ眼が晴れて、僕の目の前には怖い目つきの赤い髪のおにーさんが拳銃を僕に向けていた。

はて？これいかに？

「聞こえなかったのか？所属と目的をさっさと吐け」

所属？目的？

え？このおにーさん、何を行ってるの？

てゆーか、僕は誰？

「目的？んんん、わかんない。所属もなにも、僕は　ああ、太陽系第3惑星在住、きゃっ！！」

「ふざけていないでキリキリ吐け、俺もあまり堪え性のある方ではないからな、これがな」

ベッドに押し倒されて首筋にナイフを当てられた。ちなみに手足は長袖シャツで縛られている。

シユン

「アクセル、今日はブリーフィングがあるからって昨日言った…わ



……よ…ね……」

脇目で見ると、女の人が部屋の出入り口で固まっていた。

「あら、お邪魔だったようね。ヴィンデルには貴方は遅れるよう言  
つておくわ」

「待てレモン。侵入者だ、コイツは」

「あら、可愛い侵入者ちゃんね」

女の人が僕達の方にやってきた。

「初めまして、お嬢さん。私はレモン・ブラウニング、よろしくね。  
こっこのわ〜いおに〜さんは、アクセル・アルマーよ」

「レモン…」

「いいじゃない。で、貴女の名前は？」

「えーっと……わかんない。うん。誰なんだろ？僕」

「記憶喪失？」

「わからん。ふざけているだけかもしれん」

「ふざけてないよ」

「貴様は黙っている」

「ううっ」

このおにーさんは怖いよ……。

「そんなに睨んじゃダメよ、アクセル。一応検査その他諸々はコッチでやるから、貴方はブリーフィングに行って」

「わかった。だが 貴様、下手なマネはするなよ」

「……はい」

部屋を出て行くアクセル。

「さ、ついて来て」

「はい……」

「大丈夫よ。取って食いはしないから」

「うん」



「さ、服を脱いでもらえる？これからいろいろ検査させてもらうから」

「はい」

服というよりピッタリしたボディースーツのような物とマントを脱ぐ、というよりぽんぽん脱ぎ捨てるように脱いでいくあの子。

「男の子だったのね」

「ん？なに？レモン」

「なんでもないわ。それとこれから溶液を満たして検査するけれど、呼吸は出来るから」

Wシリーズの調整槽に彼をいれさせ、酸素マスクをつけさせる。

あとは端末を操作して調整槽に溶液を満たしていく。

本当に素直でイイ子なのね。私の言ったことを正直に信じて、全く不安がらないもの。

「じゃね……」

興味本位で調べてみたけれど、スパイよりよっぽど厄介だわこの子。とりあえずDNAデータは部隊のIFFに登録しておかないと、あの子達が侵入者と間違えるから。

それにしても、念動力者を手元に置けるのは嬉しい限りね。

となると、ヴィンデルにも言わなければならないわね。っと、その前にこの子に名前をつけてあげないと。

「奇遇……偶然……いえ、運命……フェイト……フェイトにしましょ」

フェイト・ブラウニング。

そう呼びましょ。

「フェイト、もう終わったから、出ていいわ」

「フェイト？」

「そう、アナタの名前は今日からフェイトよ」

「フェイト……フェイト……僕が……フェイトか……」

あら、喜んでくれるかと思ったら、なんか考え込み始めちゃったわ。

「もしかして、フェイトはイヤだったかしら？」

「ううん。そんなことないよレモン。ありがとう」

直ぐ、直視するには無邪気で綺麗過ぎる笑顔を向けてくれたけれど、あの顔は、自分がその名前を名乗っていいのかどうか悩んで見えたわね。

本当の名前があるかどうかで悩んでいただけならいいのだけれど。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

フェイト・ブロウニング

レモンが僕につけてくれた名前。

でもフェイトって聞いた時に、僕がこの名前を名乗っていいのかわるのか、考えてしまった。

理由は僕がフェイトにそっくりだった。でも僕はフェイトとは全然違うから、その名前を名乗っていいのか悩んじゃった。

でもレモンが考えて、たまたま名前がフェイトになったんだったら、まあ、良いかな？って、思えたんだ。

それに嬉しかったし。

レモンはヴィンデルっていう人に報告があるからって、僕をアシエンに任せて行っちゃった。

アシエンはアンドロイドで、全身に武器がいっぱいいてるんだ！

ワイヤード・フィストもついてるんだって！

エステバリスだよ！スゴいよ！カッコいい！！

やあ、レモンは漢の浪漫がわかるくちだよ。

あとでバルディッシュ造ってもーらお！

「アシエン、次はどこ行くの？」

「ふむ。あらかたは見せてしまったからな……少し待て。レモン様」

アシエンはアンドロイドだから通信だって出来るんだ。

レモンに言ってKOS・MOS造って貰おうかな？

「許可が降りた。格納庫に向かうぞ」

「はい！……で、格納庫ってなに？」

「行けばわかる」

アシエンに手を引かれて、いくつもの角を曲がったり、扉を潜って着いた格納庫には

「おお~~~~~！！すっごお~~~~~いっ！！」

そこにはMSくらいのサイズのロボットが所狭し寿司詰めで並んでいた。

「ねーねーアシエン！アレってなんなの？」

「パーソナル・トルーパー 通称PTと呼ばれる人型機動兵器だ。アレはそのPTの内の1機、量産型ゲシユペンストMk-？。PTの開祖とも言えるゲシユペンストMk-？の直系の機体だ」

「へえ……なんか強そう。こう、殴ったり蹴ったりとか強そうだね」

「確かに、ゲシユペンストは汎用機だが、そういう使い方もある」

「ふん。ねえ、あっちの灰色で背中にフライトユニットとビーム砲みたいなの積んでるヤツは？」



「アレはエルアインス。最新型の量産型PTだ。分かり易く言ってしまうえば、究極の汎用機だ。お前の言ったとおり、背中のツイン・ビームカノンによる遠距離から、手持ち火器による近々中距離戦闘をそつなくこなせる汎用機としては理想的な機体だ」

「成る程、特徴が無いのが特徴な機体なんだね」

「なんだそれは？」

「つまりバランスが取れ過ぎてて、あげるべき特徴がないって事さ」  
「なるほど、確かにそういう意味では特徴はなくバランスは取れている機体のアレだ」

ゲシュペンストはちよいスマートなドムで、エルアインスはジム・カスタムとジム・キャノン？のハイブリッドな機体なんだね。

その他にもファンネルを積んでるアシュセイバーとか、変な形のりオンっていうAMも見せてもらったんだ。

で、気になるのが……。

「アシエン、アシエン、シミュレーターに乗りたい！！」

ここまで来てシミュレーターやらないヤツは男じゃないよ！

「少し待て。…レモン様」

楽しみだなあ……ワクワクするよ！

ビーツ！…ビーツ！…ビーツ！…ビーツ！…ビーツ！…ビーツ！…

ズドーーーーンッ！！

『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』  
『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』  
『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』

「わわわわ！？なに、なに、なに！？」

「敵襲！？」

『総員第一戦闘配備！…繰り返す！総員第一戦闘配備！…』

『DC残党の襲撃を受けた！PT部隊、スクランブル！』

「アシエン！」

「来いフェイト！」

地響きと振動の中、アシェンの方に走る！

ピキーンッ！

「うっ！」

頭に強烈に『嫌な予感』がした。

するとアシェンが僕に駆け寄って来て、僕を押し倒した。あ、アシェンって少し胸控え目だけど結構あるし柔らかいし温かいんだ。アンドロイドとは思えないって

僕が口を開こうとした瞬間。鼓膜が破れんばかりの轟音と眼を灼き尽くさんばかりの閃光と肌を焼かんばかりの熱風に襲われた

第1話 招かれた異邦人・エトランゼ・（後書き）

とりあえず1話目です。

ちなみ外見がアホの子であります。中身はそれなりにしっかりしながらも素直で正直者で精神的に退化？しています。

よろしければ感想ください。

## フェイト・ブロウニング(前書き)

我らがアホの子主人公、フェイト・ブロウニングの設定です。  
一部修正しました。

## フェイト・ブラウニング

フェイト・ブラウニング

所謂転生者で元自宅警備員。

フェイト・ブラウニングという名はレモンからつけてもらった。

容姿はリリなの雷刃の襲撃者・レヴィ・ザ・スラッシャー・そのまま、肉体に引つ張られるのか、時たまアホの子になる。性別は男の娘。しかしなのポをやっていないフェイトは雷刃の襲撃者を知らない為、自分を色違いフェイトだと思っている。

アホの子、素直過ぎる子ではあるが、中身がヲタクの為、突発的発想力や物事の見通しはそこらの科学者や指揮官より上。

不自然が起きないように、生前の自らの記憶、OGシリーズ関係が一部ぼつかりなくなっている。しかし特定条件を経ると思い出される。ちなみに機体や技術関係は例外なのかしつかり覚えてる。

パイロット能力

「格闘」 : 138

「射撃」 : 124

「命中」 : 145

「回避」 : 210

「防御」 : 98

「技量」：155

「SP」：64

性格：熱血

地形適応

空 A 陸 A 海 C 宇 A

エース

移動力+1、回避率+10%、クリティカル率10%、格闘武装での与えるダメージ+20%

精神コマンド/直感、熱血、気迫、直撃、集中、魂

特殊技能

念動力L5、戦意高揚、アタッカー、見切り、インファイトL7、気力+（回避）、気力限界突破、SP回復

第2話 極めて近く、そして限りなく遠い凶鳥（前書き）

また少し手直し



第2話 極めて近く、そして限りなく遠い凶鳥

「いったたたた」

どれくらい意識がなかったのか、頭がぐわんぐわんする。

怪我は……してないのかな？

つて、そーだよ!!

「アシエン！」

僕を爆発から庇ってくれたアシエン。

爆発の衝撃でシステムダウンしてるのか、アシエンに動きはない。

「アシエン！アシエン！」

「うく」

「アシエン！」

「だいじょうぶだ」

眼を覚ましたアシエン。でもその顔は険しい。

「アシエン、なにがあったの？」

「わからん。だが、状況から見ると、この格納庫が攻撃されたのだろ。基地襲撃時は先ず敵の戦力を可能な限り潰すのがセオリーだ」

「なるほど……。アシエン、動ける？」

「問題ない。と言いたいが、左脚のアクチュエーターに機能障害がある。おそらく爆発の影響だろう。無理をすれば動けるレベルだ」

「無理をすれば……。ね」

「フェイトに怪我はないか？」

「うん。アシエンが守ってくれたからね！」

「そうか」

僕の答えにそう言ったアシエンは、腕を床について上半身を起こす。僕も起き上がって、マントについた埃を払う。

「うわぁ……。ぐちゃぐちゃ」

「瓦礫の下敷きにならなかったのは幸いだったな」

僕がさつき見た格納庫とは180度様変わりでぐちゃぐちゃ。PTも何機かしか生きていない。

「どっしょよう、アシエン」

「……未だ戦闘は続いている。生身で行動するのは危険だ。PTでここを脱出、本隊と合流する」

「らじやー!」

「良い返事だ。待っているフェイト、使える機体を探してくる」

「わかった」

片足を庇うように立ち上がったアシエンは、足を引きずりながらPTの方へ歩いていった。

「う~~~~ん」

特にやることもないから辺りを見回してみるけど、やっぱり今が戦闘中なんて実感が湧かない。

でも遠くだとまだ爆発音が聞こえる。

ピーンッ！

「うっ、また……」

何故かわからないけど、何かを引き寄せられるように、僕は足を進めた。

瓦礫を乗り越えて進んだ先には、爆発してめちやくちやの格納庫の中にあっても、何者にも穢されないかのように佇む1機の黒いPT。

「…ゲシュペンスト…じゃない。…ヒュッケバイン……違う、でも……」

ふと頭に浮かんだフレーズを勝手に口にしていった。

僕は迷わずPTに駆け寄った。装甲をよじ登ろうとすると、PTが勝手に動いて、その手で僕を掴むと、コックピットまで上げてくれた。

僕がコックピットに飛び込むと、ハッチが閉まる。

暗くなったコックピットに薄暗く光りが灯る。

「どうしてだろ？触ったことないのに、動かし方がわかる」

半分動に近い確信でボタンを押していく。

モニターにS・SRXと、表示された。

ピキーンッ！

「くうっ！！」

いきなり頭痛がしたと思ったら、このPTの動かし方が少しずつわかっていく。まるで、情報をインストールされるように。

「なんだかよくわかんないけど、いくよ！ヒュッケバイン！！」

フェイトがヒュッケバインと呼んだPTのツインアイに光りが灯る。

フットペダルを踏み込み、機体の推力を上げてジャンプ。

「テスラ・ドライブも搭載されているのか……なら、飛べ！ヒュッケバイン！！」

黒煙を抜けた先は、戦場だった。



対するこちら側は、奇襲された上、格納庫もいくつか潰された為、量産型ゲシユペンストMk-?、エルアインス、ランドグリーズ、量産型アシユセイバーが全機で約30機。キルレシオ、技量、機体性能はこちら側にあるが、勢いと物量は向こうにある。

今は拮抗しているとはいえ、早く態勢を整えなければ、本気でこちらを潰しにかかっている連中に押される。

「く、あまり時間はかけていらねん！ハルバート・ランチャー、発射！」

上空のリオン部隊へハルバート・ランチャーを撃つアクセセル。

ビームは回避に鈍い4機のリオンを墜とすが、焼け石に水感が否めない。

「チッ、こうでは数が減らん」

再度ハルバート・ランチャーを撃とうとしたところで新しい熱源反応が出た。

破壊された格納庫から上がる黒煙から飛び出す1機の機体。

「あの機体は 誰だ、誰が乗っている!?!」

シャドウミラーに配備されている数少ない特機にして鉄屑の機体。動力調整が極めて不安定な欠陥品で、今まで2、3度しか戦闘にか出していない機体。

「S・SRX！誰が乗っている。IFF……フェイト・ブrouニング……さっきの餓鬼だと！？」

「我が名はフェイト！！フェイト・テス あ、間違えた！っ、ゲフンツゲフンツ！ 我が名はフェイト！！フェイト・ブrouニングー！！我は、悪を断つ剣なり！！！」

空中で直立腕組みで滞空し、オープンチャンネルと外部マイクでとてつもなく有名な見得をきる存在に、戦場の時間が止まる。

「アシエンを怪我させた悪者は、僕のヒュツケバインでバイーンってぶっ飛ばす！！！」

S・SRXは加速し、右手に若葉色の光りを集中させる。

「あれは！」

アクセルは驚く。その現象を知っているからだ。



「破を念じて、刃と成れ　　いづくぞおゝ！必殺ッ！！」

標的は固まる1機のリオン。

「T-LINK・ブレードナツコオ！！」

左手から発したT-LINKブレードによって袈裟斬りから右斬り上げ、そこから念動フィールドを纏ったT-LINK・ナツクルでアップー、機体制御を失い、落下するリオンにトドメの右ストレートでT-LINK・ブレードを打ち込む！

「念動爆碎ッ！！」

フェイトの掛け声とS-SRXが拳を握ると共に文字通りリオンは爆碎した。

「はは！凄いで強いぞカッコイイ〜！強くて凄くてカッコイイ！…  
そう、ボクってば最強だね！！」

準特機であるS-SRXを最危険ターゲットとみなしたのが、リオン部隊の大半がS-SRXに向かう。

「うわわわっ!!あ、危ないじゃないか!それにこいつはヒーローとか新型が登場した時は、悪者は一方的にやられるのがしょーしきなんだぞ!!」

「(そんな常識があるか……)」

あまりのアホさ加減に呆れるアクセルだが、確かにS・SRXの登場で戦場の流れは変わったのは事実だ。

「こちらも、もたつくわけにはいかんな、こいつがな。行けい!ソードブレイカー!!」

「天上天下ア!!念動破碎剣ツ!!」

ソードブレイカーによるオールレンジ攻撃と、S・SRXが投擲したT・LINKソードやエルアインスの活躍により、リオンはあらかた撃墜される。

「ガリオンはこちらに任せろ。貴様は」

「応!!狙うは、大将首!!」

複数居るガリオンに比べ、安全な長距離から攻撃するヘビィ・バ

レリオン。部隊の陣形から見ても、ヘビィ・バレリオンが大将首だ。

「ここ一番の取って置きの技でキメてやるぞ!!」

今まで以上に眩い若葉色の光りが、S・SRXに宿った。

「うわあああああつ!!」

雄叫びをあげるフェイト。

上昇するS・SRX。

そしてヘビィ・バレリオンを斜め下に捉えた。

「窮極!!スーパー!イナズマ!キイイイック!!」

ブースト降下しながら、自重も攻撃力に転化する。念動フィールドを纏った脚は集中的に念動フィールドが収束し、眩い若葉色の輝きが見えているくらいにだ。

それは若葉色の帯を引く流星のような光景だった。

迎撃するヘビィ・バレリオンだが、そのレールガンの弾丸はS・SRXに届く事無くすべて弾かれていった。

直撃する鋼鉄の蹴り。

「うおおおおおっ！！ブチ抜けええーっ！！」

それは易々とヘビィ・バレリオンを一撃のもとに蹴り碎いた。

滑りながら着地するS-SRX。

「どんな装甲だろうと」

立ち上がり、再び直立し腕を組む。

「蹴り破るのみ！！」

背後でヘビィ・バレリオンが爆発し、後光を浴びてその存在を誇張し強調する凶鳥。その姿は、味方には鬼神、敵には死神に見えることだろう。

第2話 極めて近く、そして限りなく遠い凶鳥（後書き）

フェイト出撃の回。

アホっぽさを出すのって案外難しい。

感想お待ちしております。

### 第3話 アホの子とスバル（前書き）

大分修正を入れ、ガンダム成分を削ってみました。

### 第3話 アホの子とスバル

side: フェイト・ブロウニング

「知らない天井だ……」

僕は確か

ヒュッケバインもどきに乗って戦ったんだ。でも戦闘のあとに気絶しちゃったんだっけ……。

とりあえずナースコールで起きたことを伝えて、いくつかの検査を受けさせられ、軽く疲れてベッドで横になってたら、病室にレモンが入ってきた。

「調子は良さそうね、フェイト」

「検査検査検査で疲れちゃったよ」

「必要なことよ。諦めなさい」

「むう~~~~」

「フフ」

なんだか、レモンと喋っていると、お母さんって、感じるなあ……。  
当たり前か、Wシリーズの生みの親だし。

あれ？Wシリーズって、なんだろ？

えーっと

あー！っ！ダメダメ！断片的過ぎて何がなんだかさっぱりわからないよー！

「どうしたのフェイト？」

「な、なんでもないよレモン。それより、ここは？医務室………の  
感じはしないけど」

「ここは基地から少し離れた病院よ。基地の方も少ない被害を  
受けているから、こっちに受け入れてもらったの」

「そーなのかー」

ま、格納庫もボロボロだったんだから、基地機能の幾分かもやられ  
ちゃってもなっとくだね。うん。

「それより、アナタ、良くあのS・SRXを動かせたわね」

「うーん。なんとなく勢いに任せてやったけど、ヤバかった



かなあ？」

「別に、それ程責めることはないわ。アナタのお掛けで助かったのは事実だもの。礼を言っわ、フエイト」

「えへへ〜 まあ、僕にかかればチヨロいチヨロい！！さいきよーの僕に勝てるやつなんて居ないんだから！ 一部例外アリ」

「フッフ、アナタは面白いわね、フエイト。それじゃあ、今日は安静に寝てなさいな」

「はい」

レモンが出ていった病室はシン…と静まり返ってしまった。

「暇だ」

何となく、自分の手を見てみた。

「人……殺しちゃったんだよね……ボク」

でも罪悪感の欠片も湧かない。戦いだからと割り切れたからか、それともまだこの状況を現実として認識出来てない わけがないっか。

「念動力か……」

念動力の使い方を知っていた僕。普通に頭に、攻撃の流れがイメージ出来た。アレは どうしてなんだろう。

念動力。

それは強念者の素質を秘めた人間。強念者、サイコドライバーはアカシックレコードにアクセスする力がある……か。

流石にサイコドライバーなんて公式チートは備わってないと思うけど。

「念動……集中……」

戦いの最中で得た感覚をイメージして、手に力を込めてみる。

若干手の周りが揺らめく。しかし若葉色には輝かない。

「やっぱりT-LINKシステムの補助がないとダメか……」

運が良ければ帰れる可能性もあるし、『向こう側』に行ける要素も大きくなると思ったけど。次元の壁を操る資格は、今はないらしい。

「XNディメンジョン、次元斬　か」

手に集中した念動力をX状に交差させて払う。

「いつか、やってみたいなあ……」

それが出来なければリュケイオスだけでの転移になる。僕というイレギュラーの介在で余計な事にならない為にも、バンプレイオスマでいかにしてもXNディメンジョンは必要か

「また……いつたいなんなんだろう。バンプレイオスはわかるけど、リュケイオスがなんなのかわからない。あーったく、イライラするうっ！！」

「なにやってるの、アナタは？」

「レ、レモン!？」

イライラして布団で悶々していたのをレモンに見られた。

ヤバ、すんごい恥ずかしい

「どどど、どーしたのレモン?忘れ物?」

「ええ、伝え忘れが一つね。アナタの処遇についてよ」

スルーという大人の対応に感謝しつつ、予想してた話題を出された。まあ、緊急事態でも勝手にPTに乗っちゃったから、お咎めナシは

「とりあえずは現状維持。しっかり療養しなさい。退院したあとに、  
ヴィンデル　ウチの部隊の指揮官に顔出しするから、頭に入れて  
おいて」

「わかった」

意外に穏便な内容に内心ホッとする。

ヴィンデル　ヴィンデル・マウザー大佐。地球連邦軍特別任務実  
行部隊、通称シャドウミラー隊の隊長。

僕はどうなってるんだろ？

知らないはずの知識がふと頭に浮かぶのは少し混乱する。でも今は  
そんな不安なことも味方につけないと死ねる状況だ。

味方が……欲しいな。

色違い、性別違いのフェイト・テストロッサ。ならなのはとかはや  
てとか居たらいいなって思う僕は、臆病者なんだろうか？

|| || || || || || || || || || || || || || || || || ||

戦闘から4日目。

僕はようやく検査地獄から解放された。

「自由だあああああー！！！！！！」

病院を出て叫んだ僕は悪く無いはず。

なにせ連日検査検査検査検査検査検査検査検査検査検査検査検査の  
連続で僕のSAN値は直送便代金着払いだよ。

「さて、迎えば」

確かレモンが来てくれるはず。レモンにはお世話になってばかりだ  
ね僕は。

「まあ、知り合いはレモンとアシェンくらいだし！………言っ  
てて寂しいやつだって今気づいた」

……orz。

「えーっと、もしもし？大丈夫キミ？」

地面に手と膝をついて沈んでいる所に声をかけられた。

「大丈夫じゃないかも…今更友達少ないヤツって自覚して微妙に落  
ち込んでたりする……」

「そ、そうなんだ。で、でも元気だして！キミだったら友達なんて  
直ぐに出来るよ！」

励ましてくれる見ず知らずの人にお礼を言おうとして顔をあげてザ  
ワールド……！

「あれ？もしかしてキミ、フェイト・ブラウニング君？」

「え、あ、うん。さいきょーの凶鳥乗りのフェイト・ブラウニング  
とは僕のことさ……」

とっさに切り返したからわけわかめな紹介をしちゃった。や、しようがない……よね？」

「あー、良かった見つかった。レモン主任に怒られずに済むよ」

「そ、そう。それで、キミは誰？」

「あ、忘れてた。えーっと、シャドウミラー隊技術部所属、スバル曹長であります！レモン・ブロウニング主任の代理として、フェイト・ブロウニング君をお迎えにあがりました！！」

ビシッと敬礼して僕に自己紹介したのは、間違いなく、stSのスバル・ナカジマだった。

|||||

スバルとの邂逅イベントを消化し、車で基地に向かっている僕ら。レモンは急の会議で来れず、多分アシエンは修理と調整があったから、技術部所属で歳の近いスバルにお鉢がまわってきたのかもしれない。

「それにしても、フェイト君はスゴいね。この間の戦闘記録を見たんだけど、アレはかつこよかったなあー」

「えへへ、そつかな？でも僕はあの時無我夢中で必死だったから勢いに任せてやったただけだったから、本職のスバルにだって直ぐに出来ると思つよ？」

「そつ、かなあ…？」

苦笑いするスバル。でもその苦笑いには何か苦みとは違う感情が混じっているように僕には見えた。

しばらくして基地に着き、僕達はレモンのラボに向かった。

「失礼します。レモン・ブラウニング主任、フェイト・ブラウニング君を連れて参りました」

「ご苦労様。入っていいわよ」

「はい。失礼します」

ラボのドアが開き、中に入る。

「ご苦労様、スバル。それと退院おめでとう、フェイト」

「別に怪我とかはしてなかったけどね。ありがとう、レモン」



レモンに礼をしつつ、僕は気になっていた事を訊いた。

「…ねえ、アシエンは、もう平気なの？」

「あの子なら既に任務中よ。アナタよりは元気よ」

とりあえずホツとした。Wシリーズのアシエンには要らない心配だろうけど、心配な物は心配だし。

「フェイト、退院早々悪いのだけれど、S・SRXのデータの吸い出しに協力してくれないかしら？システムロックがかかってアナタがアクセスしないとデータが開けないのよ」

「わかった。それくらいなら構わないよ」

多分T・LINKシステムが僕が乗った所為で、アジャストされてシステムロックが掛かっちゃったのかもしれない。僕なりの憶測でしかないけどね。

「ありがとうフェイト。私はあとで向かうから先に行って頂戴。スバル、フェイトを地下格納庫の第2ハンガーまで案内して」

「わかりました！」

僕はスバルに連れられて歩き、幾つかのエレベーターを使って地下に降りた。

格納庫はやっぱ肌寒い。とはいえ、僕の服は今の所フェイトの子供の頃のバリアジャケットだからなあ。僕も身体は子供だから着て違和感ないけど、やっぱり少し恥ずかしい。せめてstsのバリアジャケットならまだなんとか我慢出来るんだけど。

そう思いながらハンガーに固定されているヒュッケバインに目を向ける。ちゃんと見るけれど、外見はMk-?に近いように見えるけど、全体的フォルムはどことなくR-1に見えなくもない。

ヒュッケバインを見たところでさらに隣りにあるゲシュペンストを見つけた。青いから量産型Mk-?なのかな？

「スバル、あのゲシュペンストは？」

「あ、アレ？あれは私の量産型ゲシュペンストMk-?だよ」

スバルの機体だったんだ。なら腕のアレはプラズマ・ステーキ仕様かな？

「ねえスバル。ログ見てもいい？」

「ええ！？だ、ダメダメ！！恥ずかしくって見せられないよ！！」



レモン主任から命令された今回の任務は、フェイト・ブrowningの安全確保と身の回りの世話。

前者に自信はある。でないとなら私の存在意義の半分が無意味になる。もう半分は無意味に近いから、これだけは守らないと、私に存在する価値なんてない。

でも身の回りの世話は必要にないようにも見える。

フェイト君は見た目は私より年下に見える。でも時々私より年上何じゃないかと感じる時もある。特にPT関連の見識や見解はレモン主任に近い物を私は感じた。

一度しか乗っていないS・SRXの事も私より詳しく。

フェイト君は身動きは素人同然だけど、準特機のS・SRXを自分の手足のように動かしていた。

元々アレのテストパイロットだっただけに悔しく思うけど、人間じゃない私には限界なんだ。フェイト君はあの時の蹴りを私にも出来ると言っていたけれど、落ちこぼれで存在意義の半分が無意味の私には、フェイト君みたいになれない。

「どうかしたの？スバル」

「ううん。何でもないよ」

いけないいけない。任務中なのに気をそらしちゃ。

私は笑顔を作ってフェイト君に提案をした。

「そういえば、そろそろお昼だし、どこか食べていかない？美味しいお店紹介するよ？」

「ホント！？いこうよスバル！…あ、でも僕お金持っていない。……ハア、また今度だね」

「大丈夫大丈夫！主任からお金貰ってるから」

「っしやああああー！……！……！一意専心！征くはご飯屋さん！……者共続けえええっ！……」

喜怒哀楽が激しいね、フェイト君は。

「スバルー！早く早くう〜！……」

フェイト・ブラウニングの護衛任務。

それが私に課せられた任務。

でも、今回の任務は楽しい任務になりそうかな？

「わかったから走らなくても大丈夫だつてば！ご飯は逃げないからあー！！！」

「甘いよスバル！！ご飯は減るものなんだよ！家庭の食卓はいつも油断を許さない戦場なんだよ！！！」

「私達の行くのはお店だし、そんな直ぐにはなくならないよ！」

「美味しくない病院食生活からの解放ーーーー！！！」

フェイト君は時々わざとなのか素なのかわからないポケをかますみたい。

ポケ対応のソフト、今度レモン主任に頼もつかないかな？

第3話 アホの子とスバル（後書き）

意見や感想をよろしくお願いします。

第4話 アホの子とヴィンデル・マウザー（前書き）

ヴィンデルとの顔合わせです。ホントにそれだけ



## 第4話 アホの子とヴィンデル・マウザー

side：フェイト・ブロウニング

今僕は1人の人と話していた。

「初めまして、と言うべきか。本当ならばもう少し早く顔を合わせ  
て礼を言いたかったのだが、本拠地を攻撃されたとあって時間が取  
れなかったのだな。私はヴィンデル・マウザー。シャドウミラーの  
総指揮を執っている。先の戦闘での援護には感謝する」

「いいえ、僕は生きる為に行動したまでですから」

「しかし誰にでも出来るわけではない。君のお陰で被害も減ったの  
も事実だ。それは誇っても良いことだ」

「そ、そうですね……」

ヴィンデル・マウザー大佐。シャドウミラーの指揮官。

少し威圧感が喋りにくい。値踏みされてるみたいで。

「さて、突然で悪いのだが、我々の部隊は特殊部隊の都合上決して  
多くの隊員を保有しているわけではない。機動兵器のパイロットは  
よりその傾向にある。君も見ただろうが、先の戦闘で少なくない被

害を受け、猫の手も借りたい程なのだ。もうある程度予想はついて  
いるだろうが、私は言葉にして頼もう。君の力を暫し我々に貸して  
はくれないか？」

ヴィンデル・マウザー大佐からの協力要請はある程度予想は出来て  
た。や、誘われなかったら申し出る気でもいた。少なくとも、僕は  
行き場所がないんだから。

「わかりました。僕はもとより行く宛てがなかったので、その申し  
出は有り難いくらいです」

「そうか、感謝する。フェイト……ブラウニング。ようこそシャド  
ウミラーへ。我々は君を歓迎する」

その後、ヴィンデル大佐と処遇について細かな内容を決めた。とは  
いえ、衣食住と身分の保証と、配属先についてだけだ。

「成る程、了承した。身分や衣食住については確約しよう。レモン  
にも話しは通しておこう。DC部隊を退けてくれた礼とも思っ  
てくれ」

「ありがとうございます。ヴィンデル大佐」

意外とすんなり要望が通ったことに安堵する。

「…本当ならもう少し君の世界について聞いてみたかったが、時間が来てしまったようだ。また後日呼び出すかもしれんが」

「構いません。私達をご理解頂く上で必要なことでしょうか」

「うむ。ではまた後日に頼む」

「はい。失礼します」

踵を返し、ドアが開いて出ようとした所に声をかけられた。

「君は、この世界をどう思うかね？」

「一概には難しい質問だと思った。」

「……各地で散発的な小競り合いはありましようが、基本的には平和に思えます。でもその平和はヴェインデル大佐ら軍人が維持しているからこそ続いているものと思います」

でも中にはどうしようもない、私利私欲の為に肥成す軍人もいるだろうし、平和ボケや認識の甘さもある。慢心とかね。

「今の平和が何時まで続くかわかりませんが、私もその平和を維持



最後の質問の返答も、口に言うのは別に顔と眼でも語っていた。

軍の腐敗を良しとせずだが、平和であるのならば、それを維持する為なら戦う。フェイトの言いたいことは夢想事だが、あの眼は本気であり、彼にはそれを成せるだろう力。念動力がある。

伊豆のハガネ隊に行かせるよりかは、多少危険だが手元に置いておきたいというのも、ヴィンデルの素直な思いだった。彼には人を引きつける物があるとヴィンデルは見抜いていた。

「しばらくは、レモンの下で様子を見る他はないか……」

ヴィンデルは手元にある資料を見る。

それは先程フェイトが持参した資料。

タイトルは

旧式化が進むゲシュペンストとそのパイロットの救済処置。

ハロウィン・プラン

ゲシュペンストシリーズの強化改造プランであるこのプランは、現場には堅実で安定性のあるゲシュペンスト系の機体を好む者もあり、系列機の運用継続を望む声が上がっている。

確かにゲシュペンストシリーズは発展性も優秀で、エルアインスの登場により旧式化は否めないが、柔いエルアインスよりも格闘戦に

十分耐えうる装甲強度を持つゲシュペンストはベテランから新人にまで未だに好まれる傑作機である。

多額の資金を投入して新型機を量産配備するよりも、初期量産機の近代化改修と延命措置による旧式機のマイナーチェンジにより、安く高性能機を揃え且つ乗り慣れた機体のまま戦えるという、現場にも財布にも優しいプランである。

只でさえ、ベテランのゲシュペンストと新人のエルアインスではキルレシオに大差が付き、場合によっては最新機のエルアインスが相手にならないポテンシャルを秘めた機体だけに、このプランは恐ろしい価値がある。しかもそれを見た目10代に満たない子供が考えたとあれば尚更だ。

フェイトはこれを試金石と言って渡して来たが、いざ箱を開けてみればとんでもない代物に、ヴィンデルは薄ら寒い物を感じた。

だがシャドウミラーの勢力拡大とゲシュペンストを主力に使っているだけに戦力向上にも十二分に役に立つ物だ。

「お前が何を目指し、何を考えているのか、不明瞭な点が多いが、使わせて貰おうフェイト・ブロウニング」

ヴィンデルの声は静かに執務室に響いた。

#### 第4話 アホの子とヴィンデル・マウザー（後書き）

あちら側にはハロウィン・プランがないのだろうと思い、ちょうど良いと思ってフェイトにハロウィン・プランを提出させてみました。理由はゲシュペンストが主力のシャドウミラーの戦力向上とフェイトの利用価値の確立だったりします。

意見や感想なりんだり、バンバン送ってください。

## 第5話 アホの子と影のオヤブン！

side：フェイト・ブロウニング

ヴィンデル大佐にハロウィン・プランを提出したのは正解だった。

僕は翌日から技術部に曹長として配属され、シャドウミラー隊におけるハロウィン・プランの責任者になった。とはいっても肩書きだけだけど。僕はアイデアを出せても専門知識は勉強中だしね。

とりあえず予備機の2機の量産型ゲシュペンストMk-?を改修中である。

1機はスバルに、もう1機はレモンに相談してアクセル・アルマー隊長に渡す事になった。

スバルの方はともかく、アクセル・アルマー隊長の機体はワンオフカスタム機になりそうな勢いだ。特にダッシュ力を強化するのにゲシュペンストMk-?のデータを流用する程で、飛行用のテスト・ドライブも推進力にまわす為、飛ばない陸戦機と先祖帰りしている。でもアクセル・アルマー隊長はアシユセイバーを乗機にしているから大丈夫だってレモンが言ってた。

2機のゲシュペンストMk-?が改修工事を受ける中、僕のヒュッケバインも実戦装備が施されていく。

全体像はR-1にもっと近くなった。しかも変形機構もあってウィング形態になれるから本当にR-1みたいだ。



アイデアを出すだけ出したあとは、レモンに任せるしかない僕は、ヒュッケバインのマニュアルを読んだり、筋力トレーニングやランニングをして少しでも体力をつける努力もしてる。たまに時間のあいたスバルと組み手をする事もある。僕の戦闘スタイルは近接格闘戦。機体が機体だから、R-1やバンブレイオスを真似る方が念動兵装のイメージがし易いんだ。

さらにPTが伊達に人型であるだけに、そのパイロットも自らの五体を鍛え、格闘技なりなんだりを習得すれば接近戦での駆け引きも上手くなるらしい。

「自分の五体も満足に御せんで手八丁で済むと思うな。か」

極東方面軍伊豆基地、旧特殊戦技教導隊所属、カイ・キタムラ少佐の名言の一つである。

「僕がフェイトみたいにバルディッシュとか使えたらなあ……」

でもそうしたら今度は戦斧や大剣の訓練もしないとならない。

「ザンバーは使ってみたいなあ。参式斬艦刀みたいで」

そんなことを考えて歩いていたら、ふとプレッシャーを感じた。

「ッ!？」

慌てて周囲を見渡しながら身体を構える。でも辺りに敵意らしき物を感じない。

「今の………いつたい」

再度辺りを念入りに見渡した所で、通路の窓から外が見え、そこには人が立っていた。

がたいから見て男。

プレッシャーはその男から発せられていた。

その手には木刀を握り、眼前にある鉄の柱を睨みつけていた。僕が居るのは丁度その更に先の真正面。

余波で素人に近い僕にここまでプレッシャーを感じさせるなんて、いつたい何者？

「チエストオオオオツ!!」

「ヒッ!」

気迫に当てられてへたり込む。



った。

体躯の調整後の軽いトレーニングのつもりが、まさかこんな事に発展しようとは夢にも思わなかったからだ。

「フェイト・ブラウンング」

「僕の事を知っているんですか!？」

「レモン・ブラウンングから話しは聞いている」

創造主たるレモン・ブラウンングが引き取った子供。だが

「何故俺に師事を請う」

「さっきの斬鉄を目にしたからです！僕には徹底的に欠けている物。それは戦う者の心なんです！今まで平和に平穏と暮らしていた徹底的に足りないものです。それを僕は貴方から学びたいんです！！」

酷く真つ直ぐな目を向けられて、ウォーダン言葉に詰まる。己の存在意義は、強敵との戦いにこそある。そしてこの人格も思考もイミテーション。

そしてWシリーズであるが故に、ウォーダンはこの事態をどうすれば良いのかわからなかった。

もとよりWシリーズに余計な意志や思考は要らない。只敵を倒す為に生まれたウォーダンもそうだ。

しかしフェイトを見ていると、その真っ直ぐな目を見ると、どうしたら良いのかとわからなくなる。

「もしかして、レモンの許可とかないとダメかな？」

返答に困り黙っているウォーダンを見て、フェイトはそう言った。

「いや、必要ない。……俺も完璧とは言い難いが」

知識も人格も思考もデータとしてあるが、起動したばかりの自分はそのを生かす知恵と経験に欠ける。

人に教えるのもまた良い経験になる。

ウォーダンはそう結論づけた。

「俺で良ければ、お前にその心とやらを教えよう」

「あ、ありがとうございます！」

やったやったとびよんびよん跳ねるフェイトを見て、ウォーダンは何故結論づけてまでフェイトにものを教えると決めた自分に自分で疑問に思った。

フェイト・ブラウニング

ウォーダンからすれば創造主のレモン・ブラウニングが引き取った子供。技術部所属だが、自分との接点は今日、今が初めてだ。

だがあの眼だけは信用におけるし、悪い気分でもなかった。いや、多少羨ましいとも思っただろう。

曇りのない覚悟のある眼。

それはウォーダンが求める己自身の覚悟のある眼であったからかもしれない。

「フェイト・ブラウニング。まずは基礎トレーニングから始める」

「サー！オヤブン！！」

元気の良いピシツとした敬礼を見せるフェイト。

「悪くないな」

例え造られた存在でも、根っこの部分は同じらしいウォーダン・ユミルであった。



私は今、シミュレーター訓練を受けながら、T-LINKシステムに接続をしている。

私なんかよりフェイト君の方が良いデータを得られるはずんだけど、これはレモン主任じゃなくて、私がS-SRXのテストパイロットと知ったフェイト君から頼まれた事だ。

いったい何の為なのか私にはわからないけれど、落ちこぼれの欠陥品の私でも必要としてくれるフェイト君を失望させたくない私は、S-SRXのテスト以上に取り組んでいた。

|||||

side:レモン・ブロウニング

フェイトには驚かされるばかりね。

あの子のお陰で、スバルも頑張っているようだし、W15も事後承諾なんて普通はやらないことを私に言ってきた。

でもそれだけじゃない。彼が発想するシステムには私も驚かされる。

T-LINKシステムの簡易版。T-LINKシステム程使い手を選ばず且つ同等の能力を持つラムダ・ドライバ。

しかもそれをスバルの機体に搭載させるなんてね。



彼女には僅かばかりかの念動力を保持しているけれど、PTパイロットとしては二流止まり。

そんな彼女にそこまでする理由は知らないし、訊く気もないけど、フェイトがこの先何を見せてくれるのが最近の楽しみなのよね。

|||||

side:フェイト・ブロウニング

最近はホントにハードスケジュールで普通なら倒れそうなのに、この身体はギリギリで倒れない。

やっぱり身体がフェイト・テストロツサだからかな？色違いだけど、でもやっぱりオヤブンとのトレーニングで体格差がはっきり出て来る。僕は刀や大剣やバルディッシュを使うけれど、パワーに欠ける。

オヤブン曰わく、身体の小さい方が、機体搭乗時の身体にかかるGが減るらしい。

いくらヒュツケバインにテスラ・ドライブが搭載されて耐G性が高くて、高出力のヒュツケバインはそれでも結構なGがかかる。

でもやっぱりアレだよね。着ている服が服だから最低でも15歳の

フエイトくらいの身体にはなりたいね。身体がまだ出来上がってないから、無理はするなって、オヤブンにも言われちゃったし。

「ままならないなあ……」

バルディッシュを振るいながら、ヒュツケバインにバルディッシュやら斬艦刀やらを装備させられないか悩む。

バルディッシュはまだともかく、斬艦刀を装備するならラムダ・ドライバを装備しないとなあ。

とにかく今は　！！

「浅い！もつと打ち込んでこい！！」

「言われずとも！やああああッ！！」

模擬刀を構えるオヤブンに野太刀を振るい入れる。

これは僕なりのザンバーや斬艦刀を振るう為の修行だ。

大剣は重いから、僕なりに振り回せて剣となると長剣と野太刀になった。でも訓練用の模擬武器の中で一番僕の考えに適している長さがあったのがこの野太刀の模擬刀だった。

身体全体で振り回しながら斬撃を放つ感覚も身につけられる。

「よし。今日はこれまでだ」

「あ、ありがとうございます…ござい、ま、した……」

地面に大の字でへばりながら礼を返す。やっぱり根本的に体力が足りてない。

ビーツ!!ビーツ!!ビーツ!!ビーツ!!

『スクランブル発令!スクランブル発令!』

『北方面レンジ5に敵性反応感知!各パイロットは速やかに搭乗!準備を終えた機体から順次出撃せよ!繰り返す』

「オヤブン!」

「うむ。往くぞフェイト」

「サー!イエッサー!」

僕は飛び起きて走りいくオヤブンの後に続いて駆け出した。



第5話 アホの子と影のオヤブン！（後書き）

色々無理やり詰め込んだ急展開の回でした。

影のオヤブンの乗機はどうするか……

参式は先ずダメだし、零式も本家オヤブンのところだろうし……

ヒュツケバインRX (S - SRX) (前書き)

アホの子の剣！ヒュツケバインRXの全貌を曝します！

## ヒュツケバインRX (S - SRX)

ヒュツケバインRX (S - SRX)

S - SRXは仮称で正式名称はない。

シャドウミラーに配備されている準特機型PT。準特機だがサイズはPTサイズ。フェイトはヒュツケバインと呼び、そこからさらに再調整と実戦装備を経てヒュツケバインRX (Refine) やRシリーズ、SRXとの綴りやヒュツケバインEXがあるから) との名称が与えられる。

コプセントはヒュツケバインMk - ? と同じく小型・高性能化したSRXであり、開発が頓挫したが設計自体は優秀であるヒュツケバインMk - ? にRシリーズのデータを反映して開発された準特機型PT。『あちら側』のヒュツケバインMk - ? と呼べる機体である。

外見はヒュツケバインMk - ? が基調だが、バックパック関係など細かい所はART - 1であり、武装を施せばよりART - 1の印象に近くなる。ウイング形態への変形機構も備えている。(頭部とボディはヒュツケバインMk - ?、後はART - 1といった全体像をイメージしてください。)

機体動力は新型の高出力プラズマ・リアクターだが、出力調整が困難であり、テストパイロットだったスバルはほぼ手で、フェイトはすべてT - LINKシステムで行っている。

この機体の真価は念動力者搭乗時に発揮される。

安定したプラズマ・リアクターから得られる高出力を直接機体機動に反映し、念動フィールドによる多彩な攻撃方法も存在する。もつとも、念動フィールドによる攻撃方法はパイロットがフェイトである所が大きい。

## 武装

念動フィールド

変形

EN回復（小）

フォトンバルカン

頭部のこめかみ部分に装備された光子を撃ち出すバルカン。主に接近戦用の牽制兵装である。

コールドメタルナイフ

ウィング内に収納している実体剣。ゾル・オリハルコニウム製。

HG・リボルヴアー

両腰に装備する実弾拳銃。確実な作動を優先しリボルヴアー式を採用している。G・リボルヴアーよりもバレルが延長されそれに伴いバレルウエイトも肥大化、大口径弾を使用するが集弾性の向上と共に反動も低下している。

G・レールガンカスタム

改良型のG・レールガン。長砲身化やドラムマガジンの採用により射程と装弾数が向上している。第3次のアルブレード・カスタムが使用するG・レールガンである。



ブーステッド・ライフルH

ロングバレルの実弾ライフル。ブーステッド・ライフル同様にセミオート、フルオート、3点バーストでの発射が可能。外形の変化は少ないが、IBCセンサーの性能向上に伴い命中精度が上がっている。

ミズチブレード

肘部に装備されている折り畳み式ブレード。装備位置はART-1のチェインソートンファアと同じ。打撃と斬撃を両立出来る。

メガ・ブラスタークャノン

内蔵式の高出力エネルギー兵器。胸部のシャッターを左右に開き発射する。

必殺技

念動シユート

G・リボルヴァアの弾道を念動力でコントロールする。掛け声はもちろん

T・LINKナックル

拳に念動フィールドを集中させて放つパンチ。フェイトがリュウセイ（シリーズ）を知っている為、技の叫びがリュウセイっぽくなる。

T・LINKソード

念動フィールドを剣の形に生成し撃ち出す。

T・LINKブレードナックル

念動フィールドを腕に剣状に集中させて敵を殴ったのち、フィールド

ド部分を爆発させる。

T-LINKカラミティザンバー

機体出力とT-LINKシステムをフルドライブさせて初めて使えるT-LINK系最強兵装。元ネタはシャイニングフィンガーソード。念動フィールドにより巨大なT-LINKソードを作りだして一刀両断の下に斬り捨てる。

白虎咬

念動フィールドを手に収束させて打撃を繰り出し、さらに至近距離でエネルギーを叩きつける。

舞朱雀

ミズチブレードで行う舞朱雀。ソウルゲインと同じ技で、刃はT-LINKブレードで延長している。

麒麟・暁

左右の連続パンチに続いて高速でパンチを繰り出した後、念動フィールドを纏う回し蹴りを放ち、最後はミズチブレードのアップで打ち上げてからブレードで上から両断する。

窮極！スーパーイナズマキック

究極！ゲシユペンストキックとスーパーイナズマキックのパクリだが、ブレードキックのように念動フィールドを纏う事によって、攻撃力には申し分ない。

第6話 雷刃VS星光 解き放たれる狂鳥（前書き）

た、大変だった……

## 第6話 雷刃VS星光 解き放たれる狂鳥

side:フェイト・ブロウニング

スクランブルアラート。僕にとっては2週間振りの実戦で2回目の出撃。

「大丈夫。落ち着いてやれば出来るはずだ……」

パイロットスーツの無い僕は途中で親分と別れて真っ直ぐ地下のヒュッケバインの下に向かった。

格納庫に入るとちょうどゲシュペンストに乗るスバルを見つけたけど、話しとかは後だ。今は機体の起動が先だ。

ハンガーに固定されているヒュッケバインは実戦装備と僕用に調整され、その外見はART-1にとてつもなく近い。まあ、ボディと頭部はヒュッケバインMK-?なんだけどね。

機体搭乗用の昇降機に乗って、コックピットに乗り込む。

マニュアルは毎日寝る前に熟読してたから機体の起動くらいなら見なくても出来るようになった。

「TC-OSロック解除。T-LINKシステム接続確認！ハーモ

ニクスアジャスター…セツトアップ！プラズマ・リアクター、出力安定確認！ヒュツケバインRX…起動！！」

このヒュツケバインは今真に僕の機体になっている。だから僕はRXの名を追加した。意味はリファインとSRXや、ヒュツケバインEXがあるから、そこからもじってRXってつけたんだ！

「この力で…僕は飛ぶ！」

ヒュツケバインRXが完全起動し、モニターが映る。

すると直ぐに通信が来る。相手はスバルからだ。

「なにかあったの？スバル」

「ううん。ただ、フェイト君は2回目の出撃って、聞いたから…私が言える義理じゃないけど…心配で」

「ありがとうスバル。でも僕は大丈夫だよ。僕にはヒュツケバインがあるからね！それにスバルやレモンが居るから、死ねないし、死にたくもないから」

「え？フェイト君？」

何か言い返される前に通信を切る。もとよりスクランブルで緊急事

態だしね。

でもあんな恥ずかしいこと普通に言っちゃえるなんて、僕ってこんなに素直だったっけ？

まあ、いいや。

エレベーターに機体を進ませて地上に上がる。

『敵は現在北方面と北東方面より接近中！北東方面が押されている！誰か援護を』

「ヒュッケバインRXが北東方面の支援にまわる！フェイト・ブロウニング、ヒュッケバインRX 出撃する！！」

機体を空中へ飛び立たせ、北東方面へ向ける。

「チエーンジ・ウイング！スイッチオンッ！！」

スイッチじゃなくてレバーで変形だけど、細かい事は気にしちやダメだよ？

ウイング形態に変形したヒュッケバインRXを駆り、僕は戦場に向かった。







フォトンバルカンも交えて牽制を入れながら、味方機を下がらせる。

「T-LINKコンタクト……」

T-LINKシステムで増幅した念が、次々に敵の居場所を捉える。その間に武器をブーステッド・ライフルHとG・レールガンカスタムに切り換える。

「ターゲット・インサイト……」

味方機が十分離れつつ、ヒュッケバインRXを中心に敵に囲まれる位置にわざと陣取る。

そして

「乱れ撃つぜええええつ……」

ブーステッド・ライフルHとG・レールガンカスタムのカートリッジ内の弾丸を使い切る。

今の一撃で8機のリオンと7機のランドリオンと3機のバレリオンを沈めた。

マガジンを交換しながら、二挺のライフルを背中ブースターパックに懸架させて、今度は突っ込んで来るガーリオンに向き直る。

地上から生き残りのランドリオンのレールガンやミサイルを避けながら、時には念動フィールドで防御。

ガーリオンはアサルトブレードを抜いた。近接戦を仕掛ける気だ。

バーストレールガンの牽制を見切り、コールドメタルナイフを抜く。

一太刀目は袈裟斬り。

それをミズチブレードを盾に念動フィールドで保護して受ける。

がら空きの肩にコールドメタルナイフを刺そうと突き出す。

「コールドメタルナーイーフ!!」

完璧なモーションとタイミングの突き。でも、ガーリオンはヒュッケバインのボディを蹴ってギリギリで回避した。

「このガーリオン、強い!!」

体勢を立て直す間に、ガーリオンはこちらに真っ直ぐ突進して来る。

ぶつける!? ソニック・ブレイカーか!!

「念動集中！」

僕の読み通り、ガーリオンはブレイクフィールドを展開。ソニック・ブレイカーに移行する。

僕はヒュッケバインRXの右腕に念動フィールドを纏わせる。

「必殺ツ！T-LINKナツコオ！！！」

真正面から右の拳をガーリオンにブチ当てる！

ブレイクフィールドと念動フィールドが干渉し、パワーは拮抗する。でも僕にはまだ

「左がある！！破を念じて…刃となれ！！！」

左腕をストレートでぶつける。しかし今度はT-LINKブレードナツクル。

力場を一点集中したT-LINKブレードは、T-LINKナツクルとのせめぎ合いで消耗したブレイクフィールドを易々と貫いた。

「T-LINKブレードナックル!!」

貫いたガリオンのボディにもう一発右から叩き込む。

「一撃粉碎!鉄拳制裁!!」

直撃する右のT-LINKナックル。

「破ア!!」

T-LINKナックルでガリオンを打ち抜き、背後で爆発するガリオンを無視し、地上に降り立つ。後はランドリオンを片せば戦線を巻き返して攻勢に転じられる。

「あと5機!!」

G・レールガンカスタムで射撃しようとしたところにロックオンアラート。

機体を後退させると、巨大なビームの筋が、ヒュッケバインRXの居た地面を穿つ。

さらにリーダーに熱源反応。

それはガールオンよりも早いスピードでやって来た。

その機体もガールオンだけど、ガールオン・カスタム無明の用に、テスラ・ドライブの外側に追加装甲とブースターが装備されている。さらに脚部もブースターレッグだけど、スカートアーマーもかなり大きく脚の2/3が隠れている。

眼に見える火器はマシンキャノンと左腕のランドリオンの使う大型レールガン、そしてグリップと脇の下で保持されている長身の巨砲。でも僕はそれ以前に、機体の全体像に反応に困った。

白基調に所々青と黒と金のカラーリングは、どこことなくstSの高町なのはバリアジャケットを思い起こさせた。

「ま、まさかね……」

「あなたに怨みはありませんが、墜ちてください」

嫌な冷や汗をかきながら、僕は回避行動に移る。でも地上の援護射撃はそれとなく無視出来るけれど、同じ大型レールガンで射撃するガールオンの弾丸は、面白いくらいにヒュッケバインRXに当たる。

「ぐっ、僕を守れ！念動フィールド！！」

必死に回避行動に移るけれど、軌道予測されてるかのように、避けた先に正確に攻撃が当たる。

「あうぐっ！」

攻撃を受け続け、念動フィールドに負荷が掛かって念の逆流が起こってT・LINK係数が下がるのエンドレスに陥った。

「このままじゃ」

負ける。

「まだ死ねるかっ！！」

反撃にG・レールガンカスタムを撃つ。弾道もT・LINKシステムで誘導をかけてるのに、ガリオンは易々と避けてみせた。

間違いない。機体以前に僕の技量が徹底的に負けてる！

「よく粘りますね。ですが、それも終わりです」

ピキーンッ！

「ッ！！来る！」

ピーンッ!

「この念は……いえ、そんなはずは」

ガーリオンが大型レールガンとマシンキャノンで弾幕を張る。

「くうっ!!」

念動フィールドを張って回避行動。大型レールガンの弾幕は避けきれたけれど、マシンキャノンの弾幕は避けきれずに念動フィールドで防ぐ。念の逆流が起こって、僅かばかり気を散らして、ガーリオンを見失った。

「どっ!??」

「さあ、別れを言いなさい」

「上!??」

レーザーポインターが機体に当てられ、ロックオン警報。すぐさま操縦桿を倒して機体を失速させる。でも遅かった。

「あなたを取り巻くすべてのものに……」





「  
side:スバル  
」

出遅れた私は、地上をホバー移動で駆け抜けていた。

上空ではフェイト君のS-SRX改めヒュッケバインRXとかなりカスタムされたガーリオンがドッグファイトを繰り返していた。

私はフェイト君の邪魔をさせまいと、地上のランドリオンを攻撃する。

「スプリットミサイル！」

スプリットミサイルで行動を制限する。

怯むランドリオン達にメガ・ビームライフルを撃ち込む。

射撃は苦手だから1機墜とせただけ。

まだ4機残ってる。

1機が突出、残り3機がその援護にまわった。

「1」の距離は「

接近するランドリオンからミサイルが放たれた。それは無視してランドリオンに迫る。

ゲシュペンストの装甲なら、この程度は大丈夫！

「私の距離だ！」

眼前にはランドリオン。眼前に私の間合いだ！

「ジェット・マグナム!!！」

ランドリオンにジェット・マグナムを撃ち込む。

爆散するランドリオンを背に、武器をメガ・ビームライフルからM950マシンガンに換えて弾をバラまく。

そこでヒュッケバインRXを見たら呼吸が止まった。

ヒュッケバインRXはガーリオンを見失っていて、ガーリオンはヒュッケバインRXの上方で砲撃体勢に入っていた。

考えるよりも身体が動いていた。

私を必要としてくれる人、私に笑顔をくれる人、私に再び這い上がる力をくれた人

ファイト君が……………死ぬ。

「さあ、別れを言いなさい」

そんなの

「上！？」

絶対に

「あなたを取り巻くすべてのものに……」

させない！！

「フェイトオオオオオーーーー！！！！！！！！」

私はヒュッケバインRXを射線から突き飛ばした。

ピキーンッ！

「フェイト……だっ……て……！？」

「え？」









ヒュツケバインRXの右腕が爆発した。さらに追い討ちにヒュツケバインRXは吹き飛ばされた。

「がああああッ!！」

「なんです!?!」

「さがれナノハ!！」

「クロノ!！」

ガリオンを護る様に現れたのは、ヒュツケバインRXにフォトンライフルを向けるヒュツケバインMk-?だった。

「クロノ、何故」

「君は僕達にとって希望の星だから、死なせない。命に変わっても」

「クロノ、私は」

「撤退する。ASRS展開!」

ガリオンを連れて撤退するヒュツケバインMk-?。

それをフェイトはウラヌス・システムの起動と吹き飛ばされた衝撃



のダメージで薄れる意識の中で見ているしかなかった。

**第6話 雷刃VS星光 解き放たれる狂鳥（後書き）**

またもや急展開に続く急展開。

今回、影のオヤブンの出番を見送り、リリナのキャラだけでやってみました。

意見と感想をお待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9347y/>

---

スーパーロボット大戦OG 影に属するアホの子戦記

2011年12月11日06時00分発行